

地域子育て支援センターが果たすべき役割や機能について —利用者の期待・満足度についての量的調査を通じて—

About the role and function of the regional childcare support center :

Through a quantitative survey of users

森 雄二郎

布井 雅人

水野 千都

Yujiro Mori

Masato Nunoi

Chito Mizuno

要 旨

本研究の目的は、子育て中の母親の支援をめぐって地域子育て支援センターが果たすべき役割や求められる機能について検討することであった。具体的には地域子育て支援センターを利用する母親を対象として、センターの利用状況、利用目的等に関する実態調査を行い、その期待値や満足度といった利用者ニーズを把握するとともに、センターの果たすべき役割や求められる機能について考察した。

調査の結果から、初産の母親に対するサポート、子どもを遊ばせる場、他の母親や関係者との交流の場としての機能を充実させること、商業施設と併用することの効果、開設時間の設定など、現時点でセンターが果たしている役割や機能、さらには今後充実させるために必要な視点を抽出することができた。

はじめに

近年、子どもや子育て家庭を取り巻く子育て環境はますます複雑多様化している。特に、「孤育て」という言葉が表すように母親が育児を一手に引き受けることによって、社会から孤立した状態に陥るということも少なくない。(財) 子ども未来財団のアンケート調査(2011)では、「社会から隔絶され、自分が孤立しているように感じる」との質問に対して、約3人に1人がそう思うと回答し、「地域に子育ての悩みを相談できる人がいる」との質問に対しては4人に1人が相談できる人がいないと回答している(URL1)。また、ミキハウス子育て総研の調査データ(2014)によれば、「子育てにおける孤独感を感じたことがある」と回答した母親が半数以上だったとしている(URL2)。また、3歳未満の子どもの母親の7〜8割が保育園に預けずに家庭で子育てをし、就労率が30%にとどまっているという現状(大豆生田, 2014)も、母親に子育ての負担が集中していることを示すものと言える。このように母親の子育ての負担が大きくなり、孤立感を深める中で、母親による子どもへの過保護・過干渉などの問題も浮上している。過保護・過干渉以外にも、育児不安や育児ノイローゼ、児童虐待等、子育て中の母親をめぐる問題は多岐にわたっているが、その要因の1つとして、少子化や核家族化、地域のつながりの希薄化など社会環境の変化によって、社会全体の子育ての力が低下していることが挙げられる。

たとえば、1950年代まで日本の産業の主体は第1次産業(農業)であり、家族の構成は三世帯以上が同居する大家族が主流であった。また、祖父母や兄弟姉妹、さらには叔父や叔母などの家族だけでなく、地縁的な結びつきの中での生活が一般的だったため、子育ても家族だけでなく地域社会全体が担っていたと言える。一方で1950年代半ば以降、日本経済は高度経済成長に入り、就業構造に変化が生じたことによって、家族や居住形態にも大きな変化が生じた。河野(2011)は日本の産業構造の変化を「産業の中心は農業から第2次産業(工業)あるいは第3次産業(商業)へと移り変わり、農業従事者の多くが被雇用者(会社員など)になっていった」と述べている。その結果、都市に人口が集中し、都市部では夫婦と子どもからなる核家族が増え、家族単位は小規模なものとなった。その中で、たとえば『夫は仕事、妻は家事・育児を担う』といったような家族内の立場や役割が固定化されるなど、家族のあり方にも大きな変化が見られるようになってきた。河野(2011)は、「父親の長時間労働により、家庭をかえりみる余裕も時間もない状況になり、母親には専業主婦として、サービス労働者としての役割が課せられた」とも指摘している。さらに、

都市への人口の集中や核家族化は、地域とのつながりの希薄化も招くことになった。その結果、血縁関係・地縁関係などの多くの他者によって担われてきた子育ての責任は、家庭とりわけ母親一人の肩に過剰にのしかかることになった。それが現代の子育てにおける大きな問題の1つである。

このように子育てにおける様々な問題は、社会環境の変化によってもたらされた部分が大きく、母親個人の問題と言い切ることはできない。子育ての第一義的な責任は親や家族にあるが、従来子育てとは家族だけでなく、社会全体で担うべきことであるとされる。社会の支え合いがあってはじめて、親や家族が子育ての責任を果たせるとも言われている。しかし、地域社会における人間関係の希薄さやコミュニケーション能力の低下、出会いの場の減少等は、子育てを上手く遂行するための機会や場を親や家族から奪っていることに他ならない。社会が子育て家庭のサポートのためにすべきことの1つは、経済発展・社会環境の変化の中で失われた地域社会のつながりを回復することであり、そのためには出会いの場をつくり、人とつながりやすい環境を提供していく必要がある。このような地域でのつながりは、子育てをする母親の負担を減少させ、孤立を防ぐことになる。また、母親への責任の集中を防ぐためには、子育てと就労の両立支援も重要になる。このためにも、相談したり、助け合ったりできる人や場所が地域の中で提供され、ネットワーク化されることが必要である。

このように、子育て中の母親や家庭を守り、子育てにおける様々な問題を改善するためには、社会や地域が変わる必要がある。このような変化のためには「地域社会において、行政組織を中心とする支援システムの構築とその支援を行う専門職の養成が急務」（笹川、2014）であり、その一翼を担っているのが「地域子育て支援センター」と言える。地域子育て支援センターとは、厚生労働省が管轄する「地域子育て支援拠点事業」の1つとして、主に市町村を実施主体とする公共施設や保育所・児童館などの地域の身近な場所で、乳幼児のいる親子の交流や育児相談、情報提供などを行っている施設のことであり、令和元年度時点で全国に 7578 か所存在している。昨今の社会情勢の中で母親が孤立し、子育ての不安感や負担感が増加したことや、大人や子ども間での多様な関わりが減少していること等への対応として、地域での子育て支援の活動を活性化することを通して、子育ての不安感などを解消し、子どもの健やかな成長を促すことを目的とした施設である。

地域子育て支援センターの運営主体は、市町村、社会福祉法人、NPO・市民団体など多

様であり、保育士、保健師、社会福祉士、児童厚生員、子育て経験者等のさまざまな実践者がセンターの活動に従事している。このように、多様な運営主体・従事者が混在することで、支援内容の多様化が進んできている。それは、社会の変化にともない、子育てに関する問題や課題が複雑多様化する中で、利用者の求めるニーズや支援のあり方も変化していることを意味している。

このように、利用者のニーズが多様化していく中で、地域子育て支援センターがその意義を果たすためには、利用者のニーズを把握し、それを運営に活かす必要がある。実際に、「ニーズが合致しないこと」は、子育て支援センターを利用しなくなった要因として多く挙げられるものとされる（香崎，2012）。また、センターについての情報がそもそも十分に周知されておらず、その存在を知らないが故に、センターを利用していない人も多く存在する。中谷（2001）は、子育てに関する情報は母親の個人的なネットワークによって得られることが多いことを指摘し、情報周知の在り方を検討すべきとしている。また、加藤（2002）も、保育所や幼稚園が地域に対して子育て支援機能を広く開放していたとしても、未就園の子どもを持つ親の半数はその存在を認知しておらず、周知方法を検討する必要性を強調している。このように、利用可能なはずの子育て支援施設であっても、認知状況によって利用が十分でないことも多い。

地域子育て支援センターの存在価値を高めるためには、利用者のニーズが何なのかを明らかにすることや、利用者がその施設を認知・利用するに至った要因を明らかにすることが必要である。そして、それらの結果を基にセンターが果たすべき役割や機能を充実させ、利用しやすい施設にしていくことで、地域子育て支援センターの利用を促進し、ひいては利用者である母親や子育て家庭、さらには子ども自身の効率的な支援が可能になると考えられる。

目的

本研究では、地域子育て支援センターを利用する母親を対象として、センターの利用状況やセンターに対して期待することや満足度等の利用者ニーズに関する実態調査を実施し、そのデータを分析することで、今後のセンターが果たすべき役割や求められる機能について考察することを目的とする。

方法

1. 調査方法・調査対象地

A市の地域子育て支援センター利用者を対象としたアンケート調査を2019年11月11日、12日、14日、15日の4日間で実施した。当該施設は、市内にある商業施設内に設置されており、地域の身近な場所で、乳幼児のいる子育て中の親子の交流や育児相談、情報提供などを行うことを目的としている。対象年齢は主に未就学児（0～6歳）であり、開設時間は月曜日から金曜日の10時～16時までである。開設時間中には、常駐スタッフによる子育て相談や読み聞かせ、運動遊びなどのイベントが催されている。

2. 調査対象者

調査実施日にA市地域子育て支援センターを利用した0～6歳の子どもを育てている母親93名を対象とした。

3. 調査の手続き

センターを訪れた利用者に対して、調査協力依頼書とアンケート用紙を直接配布し、その場で記入してもらい、回収した。調査協力依頼をするにあたって、調査の概要及びデータの取り扱い、守秘義務等に関する説明を文書と口頭により行い、調査協力の承諾が得られた利用者の方に調査の回答を求めた。これらの調査は、聖泉大学人間学部所定の研究倫理チェックリストを遵守したものであり、人間学部教務委員会の承認を得て実施された。

4. アンケート項目

今回の調査では、地域子育て支援センターの利用実態およびセンターへの評価を把握することを目的として、項目を設定した。

調査対象者の属性として、「年齢」「就労形態」「子どもの人数」「子どもの年齢」「同居している家族」の回答を求めた。さらに、育児に関する相談相手の有無についても回答を求めた。

地域子育て支援センターの利用状況について、A市地域子ども支援センターの継続利用年数と利用頻度の回答を求めた。さらに、センターを知ったきっかけについても回答を求めた。また、他の子育て支援事業等への参加の有無についても回答を求めた。

A市地域子育て支援センターに期待することと満足度を測定する9項目ずつの質問を設定した。期待と満足度ではそれぞれ同様の内容を尋ねる項目を、問いかけ方のみを変更する形で作成した（例「期待：子どもに色々な遊びを体験させたい」「満足度：子どもに色々な遊びを体験させることができた」）。評定は、期待（1：まったく期待していない～7：とても期待している）と満足度（1：まったく満足していない～7：とても満足している）それぞれ7段階だった。

さらに、A市地域子育て支援センターに対して望むことについての9項目に、7段階（1：まったく思わない～7：とても思う）で回答を求めた。

結果と考察

1. 分析対象・分析方法

アンケートに回答した母親93名のデータを分析対象とした。一部に未記入の箇所もあったが、実態調査でもあるため、使用できるデータはなるべく用いて集計・分析した。分析は統計ソフトHAD（清水，2016）を使用して行った。

2. センター利用実態について

アンケートに回答した母親の属性を表1に示す。母親の平均年齢は33.2歳（ $SD=4.5$ ）であり、30代が60.2%と一番多く、次いで20代（32.3%）となった。内閣府が発表する「少子化社会対策白書」（2018）によれば、第1子の出産年齢は30.7歳となっており、センターの対象年齢が未就学児となっていることを見れば、それほど年齢による利用者の特徴や傾向はないものと考えられる。子どもの人数は1人が66.7%と一番多く、自分と子どもを除く同居している人数は1人が81.7%となっている。このことから夫婦と子どもだけという核家族が多いのではないかということが推察できる。また、子ども（18歳未満の未婚者）がいる家庭の中で、子どもの数が1名の家庭は46.8%（厚生労働省，2019）であることを考えると、子育てに関する知識や情報が得られていない初産の母親ほど地域子育て支援センターを利用しやすい傾向にあるという可能性も考えられる。

地域子育て支援センターの利用実態を表2に示す。まず、調査を実施したA市地域子育て支援センターに関しては、利用期間について、1～3年未満で継続的な利用者がほと

んどであり、週に1回以上利用している母親が最も多かった。さらに、センターを知った理由においては「A市地域子育て支援センターが入っている商業施設での買い物中に見かけた」が52.7%で最も多かった。その他にも、友人や家族からの紹介やセンターの広報媒体を通して知ったという母親も一定数存在した。A市子育て支援センターの1つの特徴として、商業施設に併設されていることがあるが、本結果からも不特定多数の人が行き交う商業施設などに子育て支援センターが併設されていることで、利用が促進される効果が見られることが示唆されている。

表1 母親の属性

	人数	割合
年齢 ($M = 33.2$ 歳, $SD = 4.5$)		
10歳代	0	0.0%
20歳代	30	32.3%
30歳代	56	60.2%
40歳代以上	5	5.4%
不明	2	2.2%
子どもの人数 ($M = 1.41$ 人, $SD = 0.68$)		
1人	63	67.7%
2人	20	21.5%
3人	7	7.5%
4人	1	1.1%
不明	2	2.2%
同居人数 ($M = 1.28$ 人, $SD = 0.76$)		
0人	1	1.1%
1人	76	81.7%
2人	7	7.5%
3人	4	4.3%
4人	4	4.3%
不明	1	1.1%
就労形態		
常勤	3	3.2%
パート	6	6.5%
専業主婦	65	69.9%
育児休暇中	18	19.4%
不明	1	1.1%
相談相手		
有	83	89.2%
無	9	9.7%
不明	1	1.1%

表2 A市子育て支援センターの利用実態

	人数	割合
利用期間		
はじめて	3	3.2%
1年未満	35	37.6%
1年～3年未満	50	53.8%
3年～5年未満	3	3.2%
5年以上	2	2.2%
不明	0	0.0%
利用頻度		
はじめて	3	3.2%
週1回	29	31.2%
週2回以上	32	34.4%
月1回未満	3	3.2%
月1回以上	26	28.0%
不明	0	0.0%
知ったきっかけ		
友達に教えてもらった	24	25.8%
家族に教えてもらった	5	5.4%
ホームページ	8	8.6%
子育て支援センターの広報媒体	20	21.5%
商業施設で買い物中に見かけた	49	52.7%
SNS	0	0.0%
その他	1	1.1%
他の子育て支援事業等への参加		
よく参加している	3	3.2%
参加している	37	39.8%
あまり参加していない	36	38.7%
参加していない	15	16.1%
不明	2	2.2%

3. センターへの評価

A市子育て支援センターに対して利用者が抱いている評価（期待・満足度・望むこと）について、項目ごとに平均値を算出した。期待と満足度については、同じ内容に関する期

待と満足度の間に差があるかどうかを検討するために、対応のある t 検定を行った。

さらに、利用者属性による評価の違いを検討するために、利用者の子どもの数（1人・2人以上）、母親の就労形態（専業主婦・専業主婦以外）、他の子育て支援事業等への参加（参加あり・参加なし；参加ありは「よく参加している」「参加している」、参加なしは「参加していない」「あまり参加していない」）ごとのセンターへの評価の違いについての対応のない Welch の t 検定を実施した。

3-1. 期待と満足度

A 市子育て支援センターへの期待と満足度についての各項目の平均値を表 3 に示す。

「子どもに色々な遊びを体験させたい」「子どもを他の子どもと遊ばせたい」「我が子との時間をじっくり楽しみたい」という項目において期待評定値が高かったことから、子どもを遊ばせることができる場所としての機能をセンターに求めていることが確認できた。中でも、「子どもに色々な遊びを体験させることができた」「我が子との時間をじっくり楽しめた」については、満足度も高く評定されており、期待評定値と満足度評定値の間に有意

表3 A市地域子育て支援センターへの期待（上段）と満足度（下段）評定

	質問項目	<i>M</i>	<i>SD</i>	<i>p</i> 値
1	子どもに色々な遊びを体験させたい	5.71	(0.89)	.109
	子どもに色々な遊びを体験させることができた	5.58	(0.83)	
2	同じように子育てしている人と話したい	5.04	(1.28)	.783
	同じように子育てをしている方と話すことができた	5.01	(1.26)	
3	子どもを他の子どもと遊ばせたい	5.57	(0.96)	.000 ***
	子どもを他の子どもと遊ばせられることができた	5.01	(1.15)	
4	育児の疑問や悩みを相談したい	4.60	(1.28)	.855
	育児の疑問や悩みを相談できた	4.62	(1.22)	
5	子育てをしている人と友人になりたい	4.57	(1.31)	.083 +
	子育てをしている方と友人になれた	4.31	(1.38)	
6	子育てについての知識や情報が知りたい	5.06	(1.10)	.003 **
	子育てについての知識や情報が得られた	4.65	(1.14)	
7	リラックスする時間が取りたい	4.62	(1.22)	.148
	リラックスする時間がとれた	4.78	(1.21)	
8	我が子との時間をじっくり楽しみたい	5.33	(0.90)	.001 ***
	我が子との時間をじっくり楽しめた	5.62	(0.86)	
9	子どもとの関わりや遊び方を学びたい	5.30	(1.18)	.015 *
	子どもとの関わり方や遊び方が学べた	4.97	(1.06)	

な差がない、または満足度評定値の方が期待評定値よりも有意に高いという結果となった。一方で、「子どもを他の子どもと遊ばせられることができた」という満足度については、それについての期待よりも有意に低く評定された。これは、母子の遊びの場としての機能は十分に果たしているが、子ども間での遊び場としての機能にはまだ改善の余地があることを示している。

さらに、「同じように子育てしている人と話したい」「子育てについての知識や情報が知りたい」「子どもとの関わり方や遊び方を学びたい」といった、母親自身のためになるという機能についての期待もセンターには持たれていた。「同じように子育てしている人と話すことができた」という点での満足度は期待評定値と同程度であったが、「子育てについての知識や情報が得られた」「子どもとの関わり方や遊び方が学べた」という満足度は、それについての期待評定値よりも有意に低かった。これは、子育てについての情報提供機能の強化がセンターに求められていることを示している。

子どもの数で比較すると（表4、表5）、「同じように子育てをしている人と話す」「子育てをしている人と友人になる」という点についての期待や満足度は、子どもの数が1

表4 A市地域子育て支援センターへの期待の利用者属性による違い

		子どもの数			就労形態			他の子育て支援事業		
		1人	2人以上	p 値	専業主婦	専業主婦以外	p 値	参加あり	参加なし	p 値
		N	63	28	65	27		40	51	
1	子どもに色々な遊びを体験させたい	5.65 (0.90)	5.93 (0.81)	.151	5.56 (0.64)	5.78 (0.98)	.189	5.75 (0.95)	5.67 (0.84)	.664
2	同じように子育てしている人と話したい	5.30 (1.28)	4.46 (1.17)	.003 **	4.96 (1.29)	5.08 (1.30)	.701	5.38 (1.25)	4.78 (1.29)	.030 *
3	子どもを他の子どもと遊ばせたい	5.62 (0.94)	5.43 (1.00)	.396	5.33 (0.92)	5.65 (0.96)	.149	5.75 (0.95)	5.41 (0.94)	.095
4	育児の疑問や悩みを相談したい	4.78 (1.28)	4.21 (1.26)	.055	4.41 (1.55)	4.69 (1.16)	.395	4.90 (1.34)	4.39 (1.22)	.065
5	子育てをしている人と友人になりたい	4.79 (1.27)	4.04 (1.32)	.014 *	4.52 (1.40)	4.58 (1.30)	.834	5.03 (1.42)	4.20 (1.13)	.004 **
6	子育てについての知識や情報が知りたい	5.06 (1.16)	5.07 (1.02)	.974	4.89 (0.97)	5.14 (1.16)	.295	5.13 (1.30)	4.98 (0.91)	.552
7	リラックスする時間が取りたい	4.67 (1.24)	4.54 (1.23)	.643	4.44 (1.22)	4.71 (1.23)	.352	4.85 (1.21)	4.41 (1.19)	.087
8	我が子との時間をじっくり楽しみたい	5.35 (0.90)	5.29 (0.94)	.764	5.15 (0.82)	5.40 (0.93)	.203	5.40 (1.01)	5.24 (0.79)	.399
9	子どもとの関わり方や遊び方を学びたい	5.37 (1.14)	5.21 (1.29)	.596	5.19 (1.14)	5.37 (1.19)	.491	5.53 (1.11)	5.12 (1.19)	.096

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

人の母親の方が有意に高く期待し、満足度を得ていた。子どもの数が1人の母親は、はじめての子育てであるため、子育てという話題を共有できる他者との関わりを強く求める傾向があり、その役割をセンターが一定程度果たしているといえる。

さらに、「子どもを他の子どもと遊ばせられることができた」という満足度も、子どもの数が1人の母親の方が高く評定していた。子どもが1人だけの場合、家では兄弟などの子ども同士での遊びを体験することができないため、センターでの体験に満足さを感じやすかったと考えられる。一方で、この項目についての期待は、子どもの数に関わらず高いことから、より子ども間での遊びを可能とする工夫が必要であるともいえる。

他の子育て支援事業の利用の有無で比較すると（表4、表5）、他の事業も利用している母親の方が、「同じように子育てをしている人と話す」「子育てをしている人と友人になる」という点についての期待や満足度が高かった。これは、積極的に子育て支援に関するリソースを活用している母親の方が、他の母親とのつながりについての期待や満足度が高いことを示している。

表5 A市地域子育て支援センターへの満足度の利用者属性による違い

		子どもの数			就労形態			他の子育て支援事業		
		1人	2人以上	p値	専業主婦	専業主婦以外	p値	参加あり	参加なし	p値
		N	63	28		65	27	40	51	
1	子どもに色々な遊びを体験させることができた	5.54 (0.82)	5.75 (0.80)	.256	5.52 (0.80)	5.62 (0.84)	.606	5.60 (0.90)	5.55 (0.76)	.775
2	同じように子育てをしている方と話すことができた	5.30 (1.27)	4.36 (1.03)	<.001 ***	4.93 (1.33)	5.05 (1.24)	.689	5.45 (1.26)	4.69 (1.17)	.004 **
3	子どもを他の子どもと遊ばせられることができた	5.24 (1.10)	4.61 (1.03)	.011 *	4.96 (0.90)	5.03 (1.25)	.771	5.23 (1.33)	4.84 (0.99)	.134
4	育児の疑問や悩みを相談できた	4.76 (1.23)	4.36 (1.22)	.152	4.41 (1.05)	4.72 (1.29)	.225	4.68 (1.31)	4.61 (1.18)	.801
5	子育てをしている方と友人になれた	4.59 (1.41)	3.71 (1.15)	.003 **	4.15 (1.63)	4.38 (1.27)	.505	4.68 (1.44)	4.10 (1.22)	.046 *
6	子育てについての知識や情報が得られた	4.81 (1.05)	4.32 (1.31)	.088	4.48 (1.19)	4.72 (1.13)	.372	4.85 (1.08)	4.57 (1.08)	.220
7	リラックスする時間がとれた	4.89 (1.21)	4.61 (1.26)	.323	4.44 (1.45)	4.94 (1.09)	.119	4.80 (1.11)	4.78 (1.32)	.951
8	我が子との時間をじっくり楽しめた	5.68 (0.80)	5.54 (0.96)	.483	5.52 (0.89)	5.66 (0.85)	.482	5.63 (0.90)	5.59 (0.83)	.842
9	子どもとの関わり方や遊び方が学べた	4.98 (1.05)	5.00 (1.09)	.949	4.85 (0.99)	5.03 (1.09)	.447	5.03 (1.10)	4.96 (1.04)	.777

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

3-2. 望むこと

A市子育て支援センターへ望むことについての各項目の平均値を表6に示す。望むこととして最も評定値が高かったのは、「より近くにあってほしい」だった。また、「遊具を増やしてほしい」についても一定程度の望まれていることが明らかになった。

「より近くにあってほしい」という望みについては、子どもの数が2人以上の母親や、専業主婦以外の母親の方が高く評定していた。これは、子どもが2人以上や専業主婦以外の場合の方が、センターに来るための労力がより多くかかるためだと考えられる。さらに、子どもが1人の場合には、「個人的に相談できるスペースが欲しい」と高く評定していた。これは、はじめての子育てにおいては、その不安の解消をセンターに求めやすいためだと考えられる。また、他の子育て支援事業に参加している母親の方が、「スタッフを増やしてほしい」という評定が高かった。これは、子育て支援事業に詳しいほど、より人的なりソースへの要求が高くなることを示している。さらに、「講座・セミナーの開講回数を増やしてほしい」「SNSで子育てについての情報発信をしてほしい」などの情報提供についても、子育て支援事業への参加に積極的な母親ほど求めやすいことが明らかになった。

表6 A市地域子育て支援センターへ望むこと

	全体	子どもの数			p値	就労形態			p値	他の子育て支援事業		
		1人	2人以上			専業主婦	専業主婦以外			参加あり	参加なし	p値
	N	93	63	28		65	27			40	51	
1 より近くにあってほしい	6.09 (1.00)	5.92 (1.07)	6.43 (0.74)	.011 *		5.70 (1.14)	6.23 (0.90)	.038 *		6.23 (1.00)	5.94 (0.99)	.180
2 スタッフを増やしてほしい	4.08 (1.13)	4.05 (1.11)	4.14 (1.21)	.724		4.00 (1.21)	4.11 (1.11)	.692		4.40 (1.26)	3.76 (0.86)	.008 **
3 遊具を増やしてほしい	5.00 (1.29)	5.02 (1.29)	4.93 (1.30)	.768		4.78 (1.40)	5.06 (1.24)	.364		5.15 (1.31)	4.80 (1.23)	.203
4 遊戯スペースを広くしてほしい	4.61 (1.45)	4.67 (1.47)	4.43 (1.40)	.464		4.59 (1.42)	4.58 (1.46)	.981		4.83 (1.41)	4.35 (1.41)	.117
5 本の種類を増やしてほしい	4.53 (1.43)	4.60 (1.39)	4.29 (1.49)	.342		4.37 (1.57)	4.55 (1.35)	.598		4.63 (1.51)	4.47 (1.25)	.605
6 開設時間を延長してほしい	3.95 (1.59)	4.10 (1.60)	3.61 (1.59)	.184		4.19 (1.80)	3.85 (1.51)	.394		4.10 (1.60)	3.76 (1.56)	.318
7 個人的に相談できるスペースがほしい	4.16 (1.50)	4.43 (1.46)	3.68 (1.42)	.025 *		3.70 (1.66)	4.40 (1.34)	.060		4.28 (1.47)	4.20 (1.43)	.797
8 講座・セミナーの開講回数を増やしてほしい	4.17 (1.41)	4.25 (1.47)	4.00 (1.31)	.414		4.04 (1.43)	4.25 (1.41)	.524		4.60 (1.61)	3.84 (1.16)	.015 *
9 SNSで子育てについての情報発信をしてほしい	4.18 (1.44)	4.21 (1.52)	4.14 (1.33)	.841		4.04 (1.02)	4.26 (1.59)	.423		4.53 (1.52)	3.92 (1.35)	.052

*** $p < .001$, ** $p < .01$, * $p < .05$

まとめ

1. 総合考察

上記の結果をふまえて、今回の実態調査から明らかとなった地域子育て支援センターが果たすべき役割や機能について整理する。

1-1. 初産の母親に対するサポート

まず、子育て支援センターを利用する母親の属性として、年齢や就労形態による利用状況の違いはあまり見られなかったが、子どもが1人だけという母親の数が多かった。やはり初産（1人目）の子育てで子育てについての知識や情報が不足していることから、支援センターを利用する動機が強く働いていることが予想され、そうしたニーズに対してセンターが一定の役割を果たしているということでもある。今回は調査対象をセンター利用者に限った調査であったため、非利用者を含めた初産の母親全体に対して適切に情報発信ができていたのかまで確認することはできていないが、1人目の子育てを行っている母親をセンターが支援対象として注目し、そのニーズに沿った運営や、情報発信をすべきであると言える。

1-2. 他の子育て支援ネットワークとの連携

他の子育て支援事業やイベントに参加するなど、子育て支援のネットワークを積極的に活用する人ほど、支援センターへの期待や満足度が高くなる傾向がある。そのため、他の子育て支援事業やイベント間での接続やネットワークを広げることによって、母親自身の意識を高め、地域における子育て支援の効果をより高めることが可能になるのではないかと考えられる。

1-3. 相互作用的な遊び場としての機能

センターに対する期待として強く抱かれていたのは、主に子どもが遊ぶ場所としての機能であることが明らかになった。中でも、「子どもに色々な遊びを体験させたい」という項目では、それに対する満足度も高いことが確認できた。一方で、「子どもを他の子どもと遊ばせたい」という項目では、期待に対して満足度が低く評定されていた。つまり、子どもを単体で遊ばせるあるいは親子で遊ぶ場所としての機能が一定果たされている一方で、子ども同士の触れあいや交流といった点においては、やや不十分であるということである。

もある。単に子供を遊ばせる場としてだけでなく、その中で周囲の子どもとも交流できる機会や仕掛けづくりをすること（たとえば利用者同士が一緒に遊べるイベントや遊具の設置など）が、さらに利用者の増加や満足度向上に結び付くのではないかと考えられる。

1-4. 他の利用者との交流の場としての機能

センターに対する期待や満足度の分析からは、他の利用者との交流や結びつきを作る場所としての期待は高くなく、満足度も高くないことが確認できた。センターを中心として、母親や支援に関するネットワークが拡張されていくことが、本来のセンターの機能からすれば望ましい状態であると考えるのであれば、その部分に関してはやや十分に機能していないとも言える。期待についての評定値は低かったが、自由記載欄には「子育て相談会等を設けてほしい。意見交換会等、育児について周りの方々が行っていることを聞きたい」「母親同士でお話するきっかけや機会があればいい」などの意見も見られた。今後は利用者間の交流やつながりを創出する工夫も必要であると言える。また、子どもが1人だけ、つまり初めて子育てをしている母親は、2人以上子どもがいる母親よりも他の利用者との交流への期待を高く評定しているため、初めて子育てをする母親が交流やつながりに入りやすくなる工夫は特に必要であると考えられる。

1-5. 商業施設との併設

利用したきっかけの分析からは商業施設に併設されているということがセンターを認知すること、利用を促進することに大きく寄与していることが確認できた。商業施設内でセンターをたまたま見かけたことが利用のきっかけになるということは、積極的に情報を収集して子育て支援事業に参加している親以外の層の利用を取り込むことにつながる。これは、地域における子育てネットワークを広げるという意味では、重要であると言える。また、地方都市であるA市は、移動の基本が自家用車である。そのため、駐車場が併設されている商業施設は、子どもを連れて利用しやすい場所であり、それが利用を促進している可能性も考えられる。このように、子育て支援センターを商業施設に併設することは、偶発的な利用から利用が促進でき、アクセスに優れるという点でも有益であるということは重要な知見である。

1-6. 開設時間の設定

求めることに関するデータから開設時間の延長はあまり求められていなかったものの、自由記載のデータからは開館する日について「土・日・祝日と開けてほしい」という声もみられた。さまざまな制約のある中ではあるが、母親のニーズの点からは開設日に関して検討の余地を残していると言うこともできる。特に商業施設に併設していることを考慮すると、土日に開設することは利用者の増加や満足度向上に結び付く可能性は高いと考えられる。

2. 今後の課題と展望

本研究に残された課題と展望について述べる。今回の調査は1つの子育て支援センターを調査対象地として実施したため、一般的な子育て支援センターの機能と課題を語るには不十分であった。今後は、同様の調査を対象地や対象センターを広げて行っていく必要がある。

また、調査の対象者は利用者である母親のみに限られた。そのため、非利用者や父親の子育てに対する意識や行動、さらには子育て支援センターのスタッフや関係者にも焦点を当てて、地域子育て支援センターの現状と課題をより深く探っていかなければならない。

今回の研究では、母親の子育て支援センターを利用する動機や満足度などの実態の一端を確認するに留まっているが、今後はより具体的な支援の方法やあり方を明らかにしていきたいと考える。

付記

本論文は第3著者が聖泉大学人間学部に提出した2019年度卒業論文の内容及びデータを加筆修正したものである。

参考・引用文献

大豆生田 啓友（2014）「少子化と家族」『よくわかる子育て支援・家族支援論』大豆生田 啓友・太田 光洋・森上 史郎編,8,ミネルヴァ書房

加藤 道代（2002）「地域における育児資源活用の研究」『家庭教育研究所紀要』,85-95

- 河野 敦子 (2011) 「子育て家庭と地域の関係」『保育士をめざす人の家庭支援』山本伸晴・白幡久美子編,58
- 香崎 智郁代 (2012) 「子育て支援施設非利用者の現状と支援の課題に関する一考察-非利用者を対象としたアンケートを参考に-」『社会関係研究』第18巻第1号,22-32
- 厚生労働省 (2019) 「国民生活基礎調査」
- 笹川 拓也 (2014) 「地域社会における子育て支援の現状と課題ー子育て支援制度の変遷と子育て家庭の現状についてー」『川崎医療短期大学紀要』34号,13-18
- 清水 裕士 (2016) 『フリーの統計分析ソフト HAD:機能の紹介と統計学習・教育,研究実践における利用方法の提案 メディア・情報・コミュニケーション研究』1, 59-73
- 内閣府 (2018) 「少子化社会対策白書」
- 中谷 奈津子 (2001) 「子育て支援事業における母親のニーズに関する研究-母親の育児不安の観点から-」『愛知教育大学幼児教育研究』(10) ,25-32
- 中山 文子 (2016) 「乳幼児育児中の母親の現状と子育て支援に関する研究～塩尻市乳幼児健診アンケート調査から～」『地域総合研究』17 (part1) ,63-72

参考 URL

1. 『子育ての孤立感』厚生労働省 HP (https://www.mhlw.go.jp/shingi/2008/10/dl/s1029-11c_0002.pdf,2022年4月10日閲覧)
2. 『孤独感を感じることはありますか?』ミキハウス子育て総研 HP (<https://www.happy-note.com/research/10670.html>,2022年4月10日閲覧)